

知って備える防災メモ

第20回



『特別警報』に備えた 防災対策を行いましょ

『特別警報』には最大級の警戒を

気象台は、平成25年8月30日から

『特別警報』の発表を開始しました。

『特別警報』は、東日本大震災における大津波や、8月に発生した『台風11号』の接近に伴う三重県などでの大雨など、現在の警報発表基準をはるかに超える大雨、暴風、地震、津波、火山噴火などにより、重大な災害の起こる危険性が著しく高まっていることを知らせ、最大級の警戒を呼び掛けるものです。

『特別警報』が発表されたら

『特別警報』発表時は、数十年に一度しかない大雨や暴風などにより、重大な危険が差し迫った異常事態です。直ちに市からの避難指示・勧告などに従って、避難所へ避難するか、既に外出が危険な場合には、より安全な場所へ退避し、命を守る行動をとってください。

『特別警報』が発表されない場合でも安心は禁物です

『特別警報』が発表されない場合でも、重大な災害の恐れがあるときには、従来の『警報』が発表されるので、最新の気象情報を収集するなど、早めの防災対策が重要です。

いざというとき、一人一人が慌てず適切な行動がとれるよう、危険箇所の把握、避難場所や避難経路の確認、水・食料の備蓄やラジオの常備など、日ごろからの備えをしておきましょう。

『特別警報』

の詳細は、気象庁ホームページをご確認ください。



問い合わせ

室蘭地方気象台

(☎) 424249

人が輝き まちがときめく

仲間たち

Group

登別アミーサロン

『登別アミーサロン』は、平成元年に編み物が好きな方で結成された手編みサークルで、毎月第一・第三月曜日の10時から13時に市民会館に集まり、和気あいあいと手編みを楽しんでいます。

『持参した毛糸でそれぞれが好きなものを編んでいます。みんなで集まって話をしながら編むとより一層楽しく、大好きな編み物を通じて集まることのできるの、とても幸せなことだと感じますね。編み物を始めて55年たちますが、会員の皆さんと互いに刺激し合うことで、良い作品を作るために頑張れます』と、活動の魅力を語るのは、結成当時からサークルの代表を務める大畑啓子さん。



きれいに編めると、上達していく感動や使う喜びが生まれます



▲互いに編み方のアドバイスをする会員の皆さん

『現在、会員は60代から70代までの10人です。若い方や初心者の方でも、かぎ針の持ち方から教えますので、安心してください』と大畑さんは呼びかけます。

平成24年に入会した岡本智栄子さんは、『家に古い糸がたくさんあり、その再利用のために何か作れないかと思ったのが入会のきっかけでした。編み物は奥が深く、終わりがありませんが、回数を重ねるごとに上達していくので、いつも完成したときに感動があります。今は、体に合うように服を編むことが目標ですね』と笑顔で話してくれました。

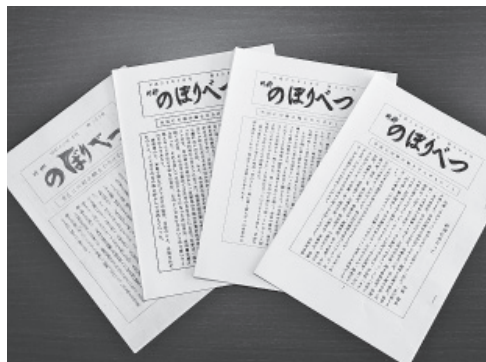
見学・入会を希望する方は大畑さん(☎) 47110)まで。

人の心の機微を捉える 川柳を広めたい

「多くの人の人にとって、人生は全てが順調に運ぶものではなく、苦労をしながら頑張って生きています。その中にある悲しみや喜びを表した川柳は強い共感を呼び、川柳の短い一句には、一冊の小説に匹敵する力があります」と話す小林勉さん。人の感情や社会風刺を主題とした、文芸としての川柳を普及させたいとの思いで、会報誌の編集や句会などの活動を続けてきました。

登別川柳社の会報誌『川柳のぼりべつ』は、同社の伝統でもある優しく温かい句を残すことに主眼が置かれていること、会員が互いの作品を選んで点数を付ける互選形式が大きな特徴で、会報誌を手書きで作っていた頃から最終号の第50号まで続きました。

「みんな他の人から点数をもらえればうれしいし、創作活動の励みにもなります。編集は、集まった句をただ掲載するよりも大変ですが、毎回寄せられる心のこもった句に励まされ、ここまで続けてくることができました。互選形式の会報誌は、投句をするメンバーが句を通してお互いに励まし合う



▲500号まで続いた『川柳のぼりべつ』

場、人の心の内に共感できる貴重な場として、地域のひとつのコミュニティにもなっていましたね」と、小林さんは会報誌制作を振り返ります。

市民に川柳の楽しさを 伝える活動を目指して

「会報誌は終刊となりましたが、句会などの活動はこれからも変わらず続けていきます。元気なうちは句会を続け、川柳の楽しさを多くの人に知ってもらいたいです」と、今後の活動への意気込みを話す小林さん。

同社の標語となっている『市民に川柳の輪を広げましょう』を自身の人生のテーマに、川柳の裾野を広げるため、活動への思いを新たにしています。



KIRARI

こばやし つとむ
小林 勉さん(登別東町)

昭和47年の結成以来、42年間に渡って句会を開き、毎月、会報誌『川柳のぼりべつ』を発行してきた登別川柳社。会員の高齢化などにより、ことし7月発行の第500号を最後に、会報誌を終刊することを決めました。

志水美德さん(初代)、加納虎男さん(2代目)の後を継ぎ、平成4年から同社の主幹(代表)を務めている小林勉さんは、文芸としての川柳を広めるため、会報誌の発行などで中心的な役割を果たしてきました。

小林さんに活動への思いと今後の取り組みについて聞きました。

文芸としての川柳を 多くの人に知ってもらいたい



昭和17年、白老町生まれ。72歳。

白老町内の学校を卒業後、3年間漁業に従事し、昭和35年から郵便局で勤務。結婚を機に登別市へ移住し、登別川柳社での活動を開始。現在は同社の主幹を務める傍ら、登別市文化協会の常任理事としても活動している。